

2019
おもろ
チャレンジ

オランダのフラワービジネスと 文化についての現地調査

経済学部 2年

勝村 瑠海

オランダ

2019年9月1日-

2019年9月26日



渡航概要と内容

花の国オランダでフラワーアレンジメントを学び、先進的な産業構造と日常に浸透した花文化を調査するという目的で渡航した。調査の達成度合いとしては良い面と悪い面があった。まず悪かったのは、世界的な巨大花き産業システムの由来を解明するというイシューは難しすぎたということだ。大企業が名を連ねる花き産業や関連団体に対して、素人の学生がインタビューを承諾してもらうのはほぼ不可能であった。産業が出来上がっていく歴史や由来を学ぶには及ばず、疑問を完全に解消することはできなかった。一方良かった面は、現地の花文化を見て回り、体感できたことだ。週末に賑わう街では、花束を手にする人々を何度も目にしたり、街によって花が多く観察される土地とそうでない土地があるということを知った。現地で行う予定であったアンケートは、Facebook上で日・蘭各々100件程度の回答を得ることができ、生の声を集めることができた。オランダ人が日本人に比べて花をよく買うことや、花をどれくらい大切に思っているかなど、習慣や意識に関するデータを比較検討した。

<日本との文化の違い等から苦労したこと>

・毎日電車、バス、トラムなどの公共交通機関を利用して移動していたが、ICカードにお金をチャージする際、クレジットまたはデビットカードしか使えない機械がほとんどだったため、現金を使えなかった。これは交通機関に限らず一部のレストランや公衆トイレにも言えることで、進んだキャッシュレス社会を感じた。大金を外貨に両替して持ち歩く必要はなかったかもしれない。

・9月とはいえ朝晩は冬のように寒い日もあったのだが、暖房を使わせてほしいと初めから伝えなかったため、数日間眠れぬ夜を過ごすことになった。遠慮ばかりしていると、その場の限りある資源を最大限享受できない。ダイレクトに話すのが好きだといわれるオランダ人に対しては、はっきり自分の考えていることを主張しても失礼には当たらない。このような文化の差に慣れるまで時間がかかった。

・家の中で靴を脱ぐ習慣がなく思うようにリラックスできなかったため、部屋を綺麗に保ちつつ裸足で過ごしたこともあった。長期海外にいるとなれば、普段通りの自分の力を出せるように心地よい環境を整えることにも注意すべき。

<渡航中に起こったトラブルとその対処法>

・大きなトラブルは起きていないが、一度だけ真っ暗な住宅街の中をひとりで歩くことになってしまい、人気もなく危なかったと思う。8時半ぐらいまで日が沈まないのだが、現地で知り合った人たちと夕食に行き、話しすぎてしまった。結局は近くのバス停まで走り無事家に帰ることができたので良かったが、Uberなどの配車サービスを日本で登録してから行けばよかったと反省している。(現地での登録は訳あってできなかった)

・公用語であるオランダ語が分からないため、スーパーでの買い物などは苦労した。洗剤と間違えて柔軟剤を買ってしまった。Google 翻訳は時々役に立ったが、現地で生活を送るなら言葉を学ぶことが一番である。





渡航を通じて感じたこと・学んだこと

渡航先に知り合いや受入機関がない状態で海外に行ったので、自分がどんな人間なのか、どんな目的でいまここにいるのか、を分かりやすくアピールする力が必要だと身をもって感じた。おもしろチャレンジは一般的な留学やただの旅行とは異なり、かといって高度に学術的な研究を目的にしているわけでもない。自分自身について曖昧なことしか説明できなかった渡航当初は、周囲から一体何者なのかと思われていたことだろう。自分が社会のなかで何者とも認識されず答えのないミッションをやり遂げるというのは、不安と楽しさが常に隣り合わせだった。同時に、日本ではある程度信頼をおかれる”京大生”という看板の有難さを知った。一日の時間を惜しみなく使い新情報にあふれていた日も、アポイントメントをとろうと送った10件以上のメールに返信が全く来ず、手持無沙汰になってしまった日もあった。そんな1か月を振り返って思うのは、目の前にやるべきことがある場合、それは速攻で片づけておくこと。そして、いつどんなチャンスがやってきてもそれを掴みとれるように万全の準備をしておくことだ。日中は外に出てめいっぱい活動し、夜はホストファミリーとの交流やネットで情報収集など、やることは盛沢山だった。不安と新鮮さのなかでタスクに追われ、時間は一瞬で過ぎていった。これは今後の人生において増えていくであろう、答えのない問を追求する際に必ず直面することだと思う。京都で大学生をしている今でも既に直面していると言った方がいいかもしれない。そんなときでもきちんと結果を出せるように、力になってあげたいと思ってもらえる人間力のようなものを身につけたい。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

上記のように人間力をつけることや、いま目の前にある課題に向き合い常に楽しむ姿勢は世界で生きていく上で普遍的なテーマであると感じた。将来の目標のようなものはまだ明確にもっていないが、被雇用者として働くのならば、労働環境などを鑑みると海外に出ていくという選択肢もあると感じた。個人主義が発達しており、歳が低くても自立している人が多かったように思う。

自身をもって強く生きる姿を是非みならいたい。

■ 本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

面白いことや興味のあることが少しでもあるのなら、果敢に挑戦することをおすすめします。かなりの奨学金をもらえて、テーマを持った長旅(=フィールドワーク)ができるチャンスはめったにないです。

好奇心を忘れずに楽しんで学んでください！

■ 主な奨学金の使途

*宿泊費

*渡航費、現地交通費

*海外旅行保険料、その他